

戯曲『ビルリ王』について

泉 恵 機

はじめに

水平社創立の発起人でもあり、「水平社宣言」の起草者であった西光万吉（一八九五—一九七〇）は、また、多くの絵を残した画家でもあり、同時に多くの戯曲やシナリオをも残している。

北川鉄夫の「西光万吉の劇作の思想^①」は、西光万吉の戯曲・シナリオについての、最初の紹介論文であるが、その中には次のものが挙げられている。^②

- 一九三三年 「ビルリ王」^③、「浄火」、「天誅組」
- 一九二五年 「因人」、「葦山のバン」、「血を飲む女」、「足」、「稲種」、「ストライキ」、「殺される命—月と日の物語—」、「修羅変相」

- 一九二七年 「冬の夜」
- 一九三一年 「青年富田久助」、「天保改革」
- 一九三四年 「同志岡見留二郎」
- 一九四七年 「沢村辰之助」
- 一九四九年 「医道生々」
- 一九五〇年 「不戦菩薩衆」、「アヒムサの城」
- 一九五一年 「法隆寺」
- 一九五二年 「選挙と先生」
- 一九五五年 「愛欲法難」（シナリオ）
- 執筆年未詳のもの 「金」、「恋と戦—鈴蘭と鮎物語—」（シナリオ—未完）、「ガラサの十字架—恋のまるちる物語—」（シナリオ—未完）、「白日夢」

(シナリオ)、「荊の冠」(シナリオ)

以上の二八編の戯曲・シナリオが挙げられているが、「ビルリ王」は、戯曲「浄火」とともに、『戯曲二篇』として一九二三年一〇月一日に中外出版から上梓されたものである。この『戯曲二篇』は同年一〇月五日『浄火』と改題して再版された。

この小論では、この戯曲「ビルリ王」を取り上げ、そこに描かれたビルリ王の苦悩に関して概観したい。

一 西光万吉における「ビルリ王」の位置

上述したように、西光万吉は多くの戯曲を書いており、その中で仏教的素材によったものや、仏教にかかわる内容をもつものとしては、「ビルリ王」、「不戦菩薩衆」、「アヒムサの城」、「法隆寺」、「愛欲法難」がある。

この五編の中で、「不戦菩薩衆」、「アヒムサの城」、「法隆寺」の三編は、「不戦・アヒムサ」をテーマにしたものであり、太平洋戦争後、西光が最晩年まで主唱した「和栄政策」の根底をなす思想を戯曲、シナリオとして作品化したものであると考えられる。また「愛欲法難」は、彼が親鸞について語るときには常に触れた、「くつ作り弓作り等

にまじわりて」生活したいという親鸞を、毛皮屋弥七という人物を登場させることによって描いたものである。これは、倉橋仙太郎や阪本清一郎が設立した創造プロダクションと西本願寺の合作の映画をつくるために、西光万吉にそのシナリオを倉橋が依頼したというのが、出した原稿は西光の希望に反して採用されなかったものである^④。

この五編の中で「ビルリ王」は西光万吉の戯曲の最初の作品であるが、少なくとも活字化されている戯曲、シナリオの中では最も長いものの一つである。しかし、単に最も長いものというのみではなくこの戯曲は西光万吉の生涯と思想の中で、非常に大きな意味と位置をもつものであると思われる。

従来この戯曲は軽視されるとまでは言わずとも、あまり重視はされてこなかったのではないかと思われる。そこには、確かに緒についたばかりと言っているような西光万吉研究の現状があることもあるが、一つには、古代インドという舞台設定にかかわって、登場人物やそこで語られることが、仏典等の、日本近代の知識人にはかなり縁遠く、また理解に困難な言葉が多く盛り込まれていることがあるであろうが、いかにも残念なことである。

しかし、西光万吉自身が語るところを辿ってみると、彼

は水平社創立の頃から戦後に至るまで、この「ビルリ王」の物語に、非常な思い入れをもっていることが伺える。

彼がこの戯曲を、自らの最初の書物として出版したのは一九二三(大正一二)年のことであつたが、その後「ビルリ王物語」という小文も残している^⑥。この頃の彼は、水平社運動の演説などの中で、ビルリ王についてよく語つたようであり、一九二二年四月十三日の奈良県小林の光明寺で開かれた水平社の宣伝演説会における西光の演説について、木村京太郎が次のように回想している。

……そのときの西光さんの演説は実に舌端火を吐くという形容そのものであつた。その時インドのビルリ王の話がされた。その内容は

「昔釈迦在世当時、インド中天竺にコーサラという国があつた。その王子ビルリが幼い時釈迦の国に遊び、新しく建つたお寺へ参詣しようとしたとき、その寺役人共が、ビルリの母が賤民出身であるからとお寺へ入ることを拒否し、『旃陀羅(せんだら・賤称)の子は穢れる』といつて侮辱した。その後成長したビルリが王になったとき、釈迦の国に攻め入り、その一族をみな殺しにして幼年時代にうけた侮辱の恨みをはらし

たのである。」

この物語りを話す西光さんは「ビルリ、旃陀羅の子ビルリよ、おぼえてろ、おぼえておけ、わすれるな、だれがゆるしても旃陀羅は、その宿命というものからゆるされることはない。旃陀羅の子ビルリよおぼえてろ、忘れるな……」といった侍臣の言葉を、のろいの炎のように吐き出されるのであつた。西光さん自身を死の寸前まで遂いやった差別の痛苦を、ビルリ王物語を通して、同じ差別に悩む私たちに訴えられるのであるから、聴くものも熱狂して「そうだ、おぼえてるよ、忘れるもんか」の聲が聴衆の中から湧き起り熱狂せんばかりになつた。私はこの西光さんの演説をきいて、非常に感激し、興奮したことを今も忘れることができない^⑦。

また、それだけでなく、「ビルリ王」の戯曲を書いてから三〇年近くたった一九五〇年に、「ビルリ王と箕掃夫バツカ」を雑誌『部落』の一、二月号の二回にわたって掲載している。その中で、「私は以前に書いた戯曲ビルリ王を、此頃改作している」と書いているから、戦後、ビルリ王の物語に読み取ったテーマを改めて取り上げ、改作を企図し

ていたことが知られる(ただし、この改作作品は発表されるには至っていない)。

このように「ビルリ王」については、水平社創立のころから、和栄政策を訴え続けた戦後期に至るまで、幾度も戯曲や小論として取り上げていることから見て、西光が「ビルリ王」の物語に感じ取ったものは、生涯にわたって彼の心をとらえたものであったと言えよう。

このように何度も作品に取り上げたということは、西光万吉が「ビルリ王」の物語の中に感じ取ったものが、彼が辿ったさまざまな思想遍歴を通じて、一貫して彼の思想形成の根底に関わるものであったからであろう。そしてそれを一言にして言うなら、木村京太郎が「差別の痛苦」、「差別に対する烈火の怒り」^⑧というように、「被差別の苦悩」ということであったと言えよう。

たとえば、「ビルリ王物語」では、「スードラに対する賤視観念」が改められないことが「ビルリ王の心情を刺激しつつづけ、その怖るべき業火を煽りたてたに相違ない。王者にして賤民、賤民にして王者と陰口されるビルリの悩みは深かったであろう」と述べている。これは、一面には「王者でありつつ賤民」であるという、引き裂かれた存在であるがゆえの苦悩を表現しているのであるが、その苦悩は、

穢れたものとして差別を受けることから出てくる苦悩であることは明らかである。

また「ビルリ王と糞掃夫バッカ」においては、被差別者ビルリの苦悩が、「佛陀直接の説諭」も効力をもたぬほどのものであると述べるとともに、「こういうビルリ王の気持ちは、冷たい不合理な差別を受けて来た私達にはよく判る」と、被差別者としてのビルリの思いと自分の思いを重ね合わせている。このことは、釈迦族の国で初めて差別を受け、自分が「賤民」の血を享けるものであることを知らされたときから、そのことがビルリの生涯を決定したように、西光万吉の生涯、その思想を決定したのもここにあることを示していると言ってもよいであろう。国家社会主義的な、右翼的な思想に流れていった戦中における彼の思想も含めて、彼の歩みの根底に、「侮辱の記憶」とその「苦悩」があったこと、そしてその記憶と苦悩を直接的に表現した戯曲「ビルリ王」は、それゆえに彼の多くの戯曲や他の作品の中でもつ位置は非常に重要なものがある。^⑨

二 戯曲「ビルリ王」におけるビルリの生と死

(1)

ここで、戯曲における物語の展開にそって、主人公ビル

りの生と死を見ていきたい。

戯曲は、古代インドの強国コーサラのハシノク王（波斯匿王 *Prasenajit*）の、まだ幼い太子ビルリが、母の故郷であるシヤカ族の国の迦毘羅衛^⑬に遊び、そこで侮辱を受けて舎衛城に帰城するところから始まる。その侮辱は、強国の王の子として生まれ、育ったビルリにとっては全く思いもかけない「センダラの子」という侮辱であった。

舎衛城で、ビルリの帰城の理由を問い詰められた家来のダルバは、仏陀のために建てた寺に、未だ仏陀の入られる前にビルリが入ったことを、寺役人が「けがれる」と侮辱し寺から追い出したことを告げるのであるが、ビルリの母の出生の秘密を知らぬ父のハシノク王にとっては、「それではコーサラのものが、いやしいとでもいうのか」と言うごとく解せぬことであった。そこへ、侮辱を受けて舎衛城に立ち戻ったビルリを追って、バサンタという少年が城に忍び込み、ハシノク王や王妃、ビルリたちの前に引き据えられる。そして彼の口から、「けがらわしい、センダラの子……」と役人が侮辱したことを知らされるのである。

ビルリの母である王妃は、この始終を聞き取り、バサンタの名前を聞かされると、ビルリを抱いたまま氣絶する。実は王妃の父の名はバサンタであり、この少年バサンタと

自分が姉弟であることを知ったからであり、センダラの身分を偽ってコーサラの王のもとに嫁してきたことが暴露される時がきたことを知ったからであった。

このように、この戯曲の中で西光万吉は、王妃が、センダラの子であること、この戯曲の中で西光万吉は、王妃が、センダラの子であることを偽って舎衛城に嫁してきたものであると設定している。しかし、ビルリについて触れた經典は「増一阿含經」や「仏說瑠璃王經」などかなりの数の經典を挙げる事ができるが、いずれの經典にも、ビルリや母の王妃の出自を「センダラ」としてはいない。

「増一阿含經」第二十六によると、波斯匿王が釈迦族から妻を迎えんとシヤカの国に圧力をかけた時、迦毘羅衛の貴種である摩呵男と「婢」の間にうまれた娘を、その種姓を偽ってめあわしたところ、波斯匿王は一目で氣に入り第一夫人として迎え、ビルリが生まれたとされている。

また、迦毘羅衛で新築されて仏陀の来迎をまつ寺で蔑みを受けたことについて、「仏說瑠璃王經^⑭」では「而微者前尊。置體于此。尋遣使者面罵之。催逐發遣。令不久滯。」と「微なる者」とし、「増一阿含經」第二十六では「時摩呵男家中婢生一女」と言い、ビルリをその子であるとし、寺院において「師子之座^⑮」に座ったビルリを、「時諸釋種

見之極懷瞋恚。即前提臂逐出門外。各共罵之此是婢子。諸天世人未有居中者。此婢生物敢入中座。」と辱めた時も、「婢生の物」としてゐるのみで、「センドラ」としてゐるわけではない。

それゆえ、この点は西光の創作であるか、何か当時流布していたビルリに関する書物を下敷きにしてゐるのであるが、そのいずれかについては不詳である。

周知のように、「マヌ法典」によれば、種姓を乱すものとして最も忌み嫌われた「プラティローマ婚（逆毛婚）」の場合、その生まれた子供はカースト・システムの中で極端に下層に位置づけられ、シュードラの男とブラーミンの女との間の子供がセンドラであるとされている^⑮。この場合、摩訶男はヴァルナとしては多分クシャトリヤかブラーミンであろうから、その「婢」との間の子供は、それに従うならセンドラではないことになる。しかし、センドラは広く「賤民」の総称として用いられており、日本においても、例えばインドにおける所謂「不可触民」とされてきたニシャード、サペラ、チャマール、ドゥービーなど多くの「不可触民」の名によってではなく、「センドラ」の語によってインドにおける「不可触民」を総称してきた。

そして、長い歴史の中で、日本の「穢多」「非人」身分

に位置づけられた人々をさして「旃陀羅」の語を用いてきた差別の歴史があり、すでに鎌倉時代初期に「旃陀羅」＝「穢多」＝「悪人」という觀念が成立していた^⑯。西光が生い育った西光寺の属する本願寺教団においても、「穢多」＝「センドラ」とする解釈が、ことに近世以降において教学者によって述べられ、忌避されてきた歴史がある。西光が、ビルリを「センドラ」としたことの背景にはこのような歴史があることを見ておかねばならないであろう。

そしてまた、「穢多」「新平民」、「けがれたもの」と蔑まれることの、蔑まれる者にとつてもつ意味を強調するために、自らの体験を重ね合わせ、「センドラの子」と西方は表現したのであろう。

西光万吉にとつて、「穢多」と侮辱され、差別されることは、戯曲の中でバサンタに、「そうだ。おぼえておけ。わすれるな。たとえ、だれがゆるしても、センドラは、センドラは、その宿命というものから、ゆるされることはない^⑰」と叫ばせているように、「宿命」という言葉で表現せざるを得ないことであつた。

三浦参玄洞は、水平社の創立に立ち上る前の西光万吉の苦悩について、次のように述べている。

……水平運動の興る前一二年彼れは唯死があつた。死を考へること、たゞそれだけに彼は日々の慰安を求めた、『地獄の焰が物質的の者であつたら、どの位私達はお助かるでせう』と一日彼は私に感慨したことがあつた「生れて來るといふことが一番悪いんです。死こそは最高相の文化です。地上に於て私共は果して何を求め、何を望みませう、一切は欺瞞です、不正です、不義です」と彼は口を極めて罵つた。彼は本當に死ぬのではありませんか？ 私は心から心配したことがあつた。

この言葉の中に、水平社創立に立ち上がる前の西光の被差別の苦しみ、よく表現されている。

ここに「地獄の焰」というには、無論、自己の罪、あるいは罪責におののく苦しみの謂ではない。尋常小学校のころから、またとくに畝傍中学校、平安中学校、さらには東京での画業の研鑽の時期にと、彼の生育の中で、彼の前に立ち塞がり、その未来を閉ざしてきたものは、常に、「部落民」として投げかけられる差別であり、『地獄の焰』とは、いつまで続くか知れない、いや、多分そのときの西光にとっては、彼の生涯の続く限りこの差別の中を生きなければならぬという、「どこまでいっても逃れるすべのな

い」「地獄のとき」と感じられた苦悩の焰のことである。この、「センダラの子」と称はれて生きることを「宿命」という言葉でバサンタに叫ばせている、或いは、「宿命」という言葉でしか「センダラ」として生きることを表現し得ない、そのことの中に、西光にとつての被差別の苦悩の性格が現れていると言える。そしてそれは、西光万吉一人のことではないであらう。

迦毘羅衛で侮辱を受けた時、自他共にコーサラの王子としてしか見えない境遇の中で生い育つたビルリにとって、全くそれはシャカ族の者たちが事実無根の言葉をもつて自分を侮辱したと見えたであらう。しかし、多くの大人たちが本気で「瞋恚」、「面罵」し「遂出門外」する様に出会つて、しだいに半信半疑になつていったであらう。そして半信半疑であつたものが、バサンタの登場と母の言葉によつて、自らの出自が「センダラ」であることを「事実」として受け入れざるを得ない場に立たされたのである。

そして、ビルリの母は、幼いビルリを舍衛城に残してバサンタとともに立ち去つていった。

前述したように、多分ビルリは当時のインド社会の中で「センダラ」と称はれる階層に位置づけられるものではなかつたであらうが、西光万吉はそれを「センダラ」として

設定することによって、被差別部落に生を享けたほとんど全てといってよい人々が、必ず出会わなければならない一つの時、すなわち、自らの出自を知らされる時と重ね合わせる思いの中から、この戯曲を書いているのであろう。

その後のビルリがどのようにして成人していったかについては、戯曲には何も触れていないが、「ビルリ王物語」では、「そして、ビルリは文武の道に励みながらも、どうしてシャカ族に仕返ししようかと思ひ悩んだことであろう。暴力でか、徳力でか、と思ひ悩んだことであろう」と述べている。^⑧

このことは、被差別者が、自らが受けた差別によってその心にもたらされるものを自らの中でどのように解決していくのか、という、被差別者が等しく出会っていかなくてはならない内面の葛藤を表現しているとも言えよう。

それゆえ西光は、經典には触れられていないビルリのころの揺れ動きを、執拗に追いかけるのである。

ビルリは揺れ動く。その揺れ動くビルリ王子に対して、まず大将ウバダイが、父波斯匿王の弟ギダ太子に玉座を委ねるのではなく、王としての玉座、権力を握れと進言する。そのギダ太子は、波斯匿王と同じく仏陀釈尊に帰依する者

である。そのような父王も太子も健在であるとき、ビルリ王が玉座に上るということは、世の権力が仏法帰依の道かという選択を意味する。それゆえウバダイは、次のように進言するのである。

……樹下石上の円頂の權威と、宝蓋玉座の王冠の権力とは、おのずから、異なるものでございます。——これほどのことは、仏陀の生まれたカピラ城のマカマナ王でさえ、十分心得ていることでございます。これほどのことを心得ずに、仏陀の教えに酔い痴れて、その身が玉座にあることをさえ忘れた王が、この広い世界に二人あるでございます。私はこれまで、今度の行幸があるまでは、そのような国王はただ一人、あのさきのマガタの国の、ピンバシヤ王一人だと思っておりました。しかるに、このたび、妙光園行幸のおともをした私は、意外にわがコーサラの王もその一人であることを見せられました。——王子様。あのマカダの太子アジャセが、父王を弑逆して王位を篡奪したことは、もちろん、罪悪でございます。しかしながらなぜ、あれだけ強大な、そして立派な、マカダ国に、ピンバシヤ王をすくいだす人間が、ただの一人もおらなかつ

たのでございましょうか。——王子様、これは、なぜでございましょうか。

……あの兄君、ギダ太子かつては、給孤独園を祇園精舎の敷地として、スダッタ長者にゆずられた、あの仏陀の帰依者に、仏徒であるがゆえに、勇ましい豹狩りの、破戒無慚の行爲をさらう、美しい孔雀と女鳩の馴らし手に、放埒遊蕩の懈怠者に、この玉座をわたされるのでございしますか。そしてやがてはこの国を、あのシャカどもにわたされるのでございしますか。——王子様。あなたはハシノク王のたった一人の王子ではないですか。……さすれば、わがコーサラの国土は、転輪聖王の光栄に震動するでしょう。その新しい王冠のまえには、仏陀もジナもバラモンもない。——マカダもオーガもクルもない。王子様。私はすでに十年以上まえから、今日の日を予想していました。三千三百三十九体の神々を奉仕させて、三重の神座に、三様に住む、火神アグニのうつし相を、私は、あの時に、みせられました。アグニの化身の王子様。燃え輝く聖火のように、この玉座から王冠を光らせてください。^⑭

続いて大将ウバダイの息子であり、幼少期からのビルリ

の友達でもあるダルバが、かつてシャカ族の国で受けた侮辱をビルリに想起させ、シャカ族に報復することを勧める。

その日です、王子様。あの日のことが、今日の日に一層まざまざと目に映り出る。勇敢に抜き放された剣も、たちまち、力なくそこへとり落として、かえって自失し倒れんとせられた。そして、あの寺の門のところで、呪われましたな。シャカどもを呪われましたな。……なんじら、これを憶念せよ。そして、われ王たるの時にと。ああ！王子様。その日がきました。その日が

……今が、コーサラの王として、あのシャカどもの言語道断の振舞いに、報いる時です。復讐のときです。私は、わがコーサラを侮辱したシャカどもに復讐したい。^⑮

この大将父子の唆しに対して、ビルリは自分の苦悩に揺れ動く心をさらけ出すのである。

いや、ダルバ。おまえは私の人間の誇りが、コーサラの玉座にあると思っているのか。ここへすわる者が、

運命の征服者だと思っているのか。

……ダルバよ。私は、シャカどもを征服するよりも、私の呪われた運命を征服したい。——たとえ何物が解放しても、センダラは、その運命から解放されぬという、マヌ法典を踏みにじりたい。

……こんな苦しい闘いを、いつまでつづけるのであらう。私は疲れている。けれども闘いつづけねばならない。運命の上に立ちあがって、センダラの祝福を謳うまで、私は闘う。^⑧

ここでビルリは、シャカ族から差別を受けたことへの怒りよりも、自らが、「センダラであること」に苦悩している。シャカ族に報復しえたとしても、「センダラ」である自分の運命は解決しない。そのことを彼は知悉しているのである。そして、その「運命を消し去る」ことの出来ないことも知悉しているがゆえに、「運命の上に立ち上がる」と言うのである。しかし、ビルリには、「センダラの祝福を謳う」ということが、具体的などのようなことであるのかは解っていない。解っていないが、少なくとも大將やダルバの言う道が、「センダラの祝福を謳う」ことの出来る世界を開くものではないことだけは、はっきり解っている

のである。

「センダラの祝福を謳う」と言うビルリに對して、ダルバは、「それは夢でございますよ。目のまえの玉座より、目に見えない運命に立ちあがりたいたい——仏陀やジナの夢ですよ」と、さらに唆すのである。しかし、それに対してビルリは、「夢ではない、ダルバよ、夢ではないのだ。それは、暗い運命の淵にうかんだ、ただ一つのほほえみの星だ」と答えているが、ここでビルリが「ただひとつの星」として感じているものは、実は舞姫アプサラとの恋の成就なのである。

私には、百のシャカ、千のカピラ城をやき滅ぼしても、それは、運命を征服したことにはならぬ気がする。私はコーサラ玉座につくよりも、彼女の胸に私の運命の玉座がある。

……私は王者にならねばならぬ。おまえの父は、さつきも私に、宝蓋玉座の権力を勧めた。そして、それが王者だと説いた。——私の母は、いつも私に、樹下石上の権威を勧めた。そしてそれが王者だと説いた。けれども、私はコーサラの玉座について、シャカを征服しようとは思わぬ。悟りの玉座について、三世を征服

しようとは思わぬ。ダルバよ。私は、あの舞姫の胸にある、愛の玉座にのほりたい。この運命を征服したい。

舍衛城に仕える舞姫アプサラはセンダラの出身である。

それゆえ、もしアプサラとの恋が身を結ぶのなら、それはコーサラの玉座とはあい容れないものである。しかし、ビルの恋は、アプサラがセンダラの娘であることによつて成り立っている。そのことをビルも知っており、アプサラも知っている。だからアプサラはビルを恋しながらもビルを受け入れることは出来ないであり、そのことを、自分はセンダラの娘ではないとビルに言い続けることによつて、彼の心を拒むのである。彼女がビルの心を容れることは、王となるべきビルを否定することになること、そしてそのみではなく、恋の「玉座」は、ビルの苦悩、彼の向き合っている問題を何一つ解決しないことをよく知っているのである。もし、彼女が真にセンダラでないならば、彼女はビルの心によるこんで添うはずである。ここにセンダラとしてのアプサラの苦悩があり、その苦悩をかくして生きなければならぬアプサラの苦しみは深い。しかし、真にビルを慕う彼女は、その心ゆえに拒否する他はない

のである。

ウバダイとダルバが去った直後に、彼はアプサラに拒まれ、そのことによつて自暴自棄に陥り、同時に、父王の危篤が知らせられる。ビルは、「いつまでも、この国のすべての人から、敬愛せられる王子であれ！玉座にのぼるな！玉座は王子の、地獄の門、阿鼻、叫喚、焦熱、無間の、地獄の門だとおおせられた——……あなたは、それでは、破滅です。墮獄です」という、母の王妃の最後の言葉を聞くことなく、

わかりました。母上よ、わかりました。けれども私はおりません。この玉座からはおりません。センダラの子として、生をうけたこの私は、そうだ。たとえ、この生命のかぎり、この呪いに呪われても、私は王として、地獄のどん底まで墮ちこもう。私は王として、破滅の火坑へとびこもう。

と、コーサラの玉座と暴力的復讐、シャカ族殲滅の道を選ぶ。その道は、彼にとって「運命を征服」する道では全くなく、墮地獄の業であり、「破滅の火坑」であることを知りつつ、その道を歩むことを選ぶのである。

そして、その果てにビルリは、いく度もいく度も「暗い」と繰り返しながら、仏陀の予言通り、船中で火災に包まれて滅びていくのである。

(2)

上に見てきたように西光万吉は、ビルリの被差別の苦悩を、特に、経典には見られないビルリの心の揺れ動きを克明に描写することによって描いている。このビルリの心の揺れは、前掲の三浦参玄洞によって描かれている頃の西光万吉の心と全く重ね合わせて読んでいいと思われる。簡潔に云うなら、それは、世のあらゆるものに価値が見いだせなくなってしまうた西光の内景の表現である。そして、差別したもののへの怒り、侮辱したもののへの怨恨や呪詛、報復に傾斜していく心、こういった情念と化した被差別の苦悩のみが、あらゆるものに価値を見いだせない彼の心を捉えて離さない。そのみが彼においてリアリティーをもつものになっていく。そういうことであろう。しかし、これらの様相をとった情念は、そのままでは決して彼を救うものではない。それは彼自身が知っていることである。

ビルリにおいても、自分を侮辱したシャカ族への怒り、報復、呪詛が彼の心を宰領する。しかし、怒りによる報復によって、彼自身の心の傷は癒えないことを知っているの

である。それらは決して自分の心を真に解きほぐしてはくれないことを感じている。つまり、真の問題は、シャカ族の差別・侮辱にあるのではなく、彼が「セングラ」として生きなければならぬ「運命」におかれているということである。それこそ、「百のシャカ、千のカピラ城をやき滅ぼしても、それは、運命を征服したことにはならぬ気がする」と、彼自身が告白していることである。問題は、「セングラとしての運命」にあるのである。

むしろそれは、「セングラ」という階層を生み出し、それを「穢れたもの」として位置づけるような権力の構造、そしてそれを受け入れた上でありたつた社会に原因のあることである。しかし、それは「永遠に」続くものとして少なくともビルリには感ぜられたであろうし、たとえそれを改変、変革し得るものであると感じたとしても、明日から無くせるといようなものではない。「セングラ」への賤視がなくなるまで「運命を征服する」ことができないのなら、そのこと自体が大きな矛盾をはらむことになってしまいうであろう。

真に「運命を征服する」こと、真に「セングラの祝福を謳う」ことが具体的に、リアリティーをもつものとして見いだせない時、憤怒、怨恨、呪詛、そしてそれによる報復

が決して事の真の解決ではないことを知っている分だけ、「運命」はいよいよ動かし難いものとして見えてくるはずである。その重さに耐えきれなくなった叫びが、西光万吉にあっては三浦参玄洞の記しているような言葉になって進ったのであろう。

ビルリには、「たとえば、だれがゆるしても、センダラは、その宿命というものから、ゆるされることはない」という言葉となつて出てくる社会意識としての「センダラ」に対する差別意識は、いかんともなし難いものに見えている。それはビルリ自身にとっては、いつまでも「センダラ」として、「穢れたもの」として生きて行かざるを得ないこととして受け止められる。怒りとセンダラからの解放への欲求が強い分だけ、「運命」は重さを増すのである。

その重さに耐え切れないビルリは、アプサラに救いを求めようとする。その甘美な楽しみに、「いかんともしがたい運命」を「忘却」しようとするのである。そして、それはアプサラが同じく「センダラ」の出生をもつものであることよつて成り立っているものである（ビルリ自身ははつきりとは気づいていない事を、アプサラははつきりと気づいている。それゆえアプサラはビルリを拒絶するのである）。

西光万吉は、この戯曲においては、そこに現れた真の問題、何によつてビルリは真に救われるのか、ビルリの真の解放とは何か、については正面から語ることをテーマにはしていない。その意味では、この時期の西光による「よき日の為に」や水平社の「宣言」の、いわば裏面にある作品である。

彼は、その揺れ動く苦悩の果てに権力の奪取とシヤカ族への報復を決断することによつて、底知れぬ滅びの道に落ちて行くビルリを描いている。

それゆえこの戯曲「ビルリ王」は、現在の部落解放という指標の中では、暗く、救いの無い作品であると受けとめられると思うが、最後に、この戯曲において注意せられることを、三点に絞つて見ておきたい。

一つには、差別の問題を、社会の制度や権力の在り方に焦点をあてるのではなく、人間の内面における苦悩の問題として取り上げていることである。「差別は観念ではない」と言われていることは了解できるが、差別が振り向けられた人間にとつて、部落解放運動が行われていようが行われていまいが、差別・侮辱は「憤怒と悲嘆と怨恨と呪詛」をもたらし得るであろう。その苦悩は、制度や機構が変革されても解決するものではない。それを逆に、出口を失っ

た苦悩のいく果てを追うことによって表現しているという点である。

二つに、この小論の中では「人間の解決」「心の解決」などの言葉で言おうとしたことと関わるが、被差別の苦悩の中から一転して水平社創立に立ち上がったといった西光万吉の内景を直接に表現している唯一の作品であるということである。その意味で、ここでは果たせなかったが、「よき日の為に」、「宣言」、「人間は尊敬すべきものだ」、「徹底的糾弾の妥当性」、「業報に喘ぐ」などの、この時期の他の著作とどのように呼応しているかを見極めることによって、西光が「センダラの祝福を謳う」と言い、「エタであることを誇る」ということの内幕が、よりはっきりしてくるのではないかと思う。そういう意味をもつ作品であるということである。

三つに、仏典の側から言うなら、かなり多くの經典に触れられているこのビルリ王の物語が、物語の核心である(センダラ)差別の問題、つまり「センダラ」として差別した側の意識・心の問題や差別を受けた側(ビルリ)の苦悩やその心情にほとんど触れていないことと関わって、近代に入ってから、この作品のように經典を読み込んでいくことがなかったことが注目される。それは、結論を急ぐ

なら、差別されるものの苦悩を、經典を読むものが感じとってこなかったことを意味しているのではないだろうか。このことについても、持続して考えていきたいが、このような作品が生まれねばならなかったことが、仏教、ことに日本の仏教の歩みと深くつながっているのではないかと思う。

註

- ① 『西光万吉著作集』第一巻所収
- ② 北川の論文の他に、戯曲については、近年上梓された『西光萬吉の繪と心』(一九九〇年 西光萬吉画集刊行委員会編)の中で「おもな戯曲作品」として西光の戯曲・シナリオが一覧表にされている。ここでは、北川の論文に拠り、一部『西光萬吉の繪と心』によって補った。
- ③ 「ビルリ王」は、『戯曲二編』では「毗瑠璃王」となっているが、この小説『西光万吉著作集』第一巻所収のものに拠っているため、それに応じて「ビルリ王」とする。
- ④ 北川鉄夫「西光万吉の劇作の思想」、宮崎芳彦「年譜―西光万吉(清原一隆)伝」(『西光万吉集』解放出版社 一九九〇年刊・所収)
- ⑤ 北川の前掲論文によると、「浄火」と「ビルリ王」はどちらも早く原稿が成立したかは明確でないとしている。
- ⑥ 『西光万吉著作集』第一巻所収

⑦ 木村京太郎『水平運動の思い出』(下)(部落問題研究書出版部 一九七五年刊)一五五—一五六ページ

⑧ 木村前掲書一五七ページ

⑨ 西光万吉は、水平社創立の発起と「よき日のために」や「宣言」に表現された思想から、獄中での「転向」、戦後の和榮思想と、表面的にはさまざまに遍歴したわけであるが、それらのすべてを、改めて「被差別の苦悩」に根拠をもつものとして見直すことが必要ではないかと思う。和榮政策の思想もそうであるが、特に、一九三三年と推測される、いわゆる共産党からの「転向声明」といわれている「マツリゴト」についての粗雑なる考察」から敗戦までの思想も、西光を動かしていた最も根底にあるものが何であったのかという、思想の動機や根拠から再考する作業はほとんど為されてこなかったと言えよう。確かに、その時期の西光は、国家社会党の支部結成や『街頭新聞』の所論を見ても、『惟神の道』の発刊(一九三八年)や国内維新と維新浄化の提唱など、国家社会主義的、「右翼」的な傾向をもったものとして見られるであろうが、彼をしてかく歩ましめた最も根底にあるもの、それは、彼がビルリ王の思いに重ね合わせた「被差別の苦悩」にあったことから見直して行くことが必要であろう。

⑩ 橋薩羅、拘娑羅。コーサラ国は、古代インド紀元前六世紀ころ強大な国家となり、北インドに覇をとなえたと言われる。舍衛城はその都城。コーサラ王ハシノクは仏陀に深く帰依したため、釈尊はしばしば舍衛城で説法を行った。

⑪ 「増一阿含經」では八才としている。この戯曲ではビルリの年齢は明らかにされていないが、父王波斯匿は四〇才近い者の母の王妃は二十四、五才とされている(『西光万吉著作集』第一巻 一四四ページ)。八才の子供の母としては若すぎると考えられるかもしれないが、当時のインドの結婚年齢からいえば違和感はないであろう。

⑫ ビルリの名前 Vindhaka については、毘留勒、毘楼勒、毘留勒又、毘流離、流離、維楼黎、毗瑠璃などと音写され、また増長、長、勝生、喪善、悪生などと意識される。「仏說瑠璃王經」では、名前の由来を、生まれたとき瑠璃宝(vaidurya)とともに生まれたことによるとしている(「産育之初。與瑠璃寶俱。因以爲號」。また「増一阿含經」第二十六では波斯匿王が即位して直後に、釈迦族の女を強引に妻として迎えんとして迦毘羅衛に臣を派遣したとき、迦毘羅衛では女を差し出す、差し出すべきではないと争論があり意見が「流離」した故かく名付けたとしている(「大王當知。求夫人時諸釋種共諍。或言當與或言不可與。使彼此流離。今當立名。名曰毘流勒」)。

⑬ シャカ族の国の都城。

⑭ Madanma。大名と意識される。

⑮ 大正大藏經第二卷六八九ページ

⑯ 大正藏第一四卷七八三ページ

⑰ *sindhasa* 獅子座。仏陀の座る所。

⑱ 「ヴァイシャ、クシャトリア及びバラモン」の女によりてシユードラより(それぞれ)アーヨーガヴァ、クシャトトリ及び、

人の最下級のものたるチャーターラ生る。これらは、種姓の混乱より生ぜるものなり」『マヌ法典』岩波文庫 一九五三年三二〇ページ

⑬ 復刻・日本古典全集『塵袋』（一九七七年刊）によると、「天竺三旃陀羅ト云フハ屠者也、イキ物ヲ殺テウルエタ牀ノ悪人也」とある。『塵袋』は二二八〇年ごろの成立とされる。

⑭ 『西光万吉著作集』第一卷一五八―一五九ページ

⑮ 『左翼戦線と宗教』大鳳閣書房 一九三〇年 一九八ページ

⑯ 西光万吉は成人していく過程で、部落差別によって苦しめられた。尋常小学校の時は同じ村の子供と一緒に通学することが多かったので、部落の子供だからといじめられても、かばってくれる仲間もあったが、中学では仲間もなく、差別と孤立に耐えられず退学した。その後京都の平安中学は宗門校であるということとで入学するが、ここに元の畝傍中学の体育の教師がおり、この教師によって彼が部落民であることを暴露され、ここにもとどまることができなかった。その後、小さなときから親しんでいた絵を学んでいこうと、東京に出て、太平洋画研究会で画業の修行を始め、すぐに仁科展に入選するなど、その才能を囑望され、師匠の岡某は自分の娘の結婚相手として考えていたようであるが、いずれ出身がバレることになるであろうと、彼は師のもとを去り絵の修行からも遠ざかっていった。このような西光が厭世的になり、自暴自棄に陥っていくことは、避け難いことであると思われる。

⑰ 『西光万吉著作集』第一卷六三ページ

⑱ 同書一六八―一七〇ページ

⑲ 同書一七二ページ

⑳ 同書一七四―一七五ページ

㉑ 同書一七六―一七七ページ

㉒ 同書一八七ページ

㉓ 同書一八七ページ

(本学専任講師 同和教育)